

1. 検索力とは何か

インターネットを利用して何かしらの情報を得ようとするとき、私たちは多くの場合、GoogleやYahoo!といった検索サービスを利用します。それは、インターネットにある膨大な情報の中から必要なものを探し出すための、今や当たり前の行為と言えます。

しかし、そうした検索サービスをただ利用するだけでは、目的の情報にたどり着かないことも少なくありません。誰しも時間は有限です。効率的で適切な検索を行うためのスキル、それをここでは「検索力」と呼ぶことにします。

では、検索力とは具体的にどのようなスキルを指すのでしょうか。検索をするうえで私たちがすることといえば、例えば以下のようなことが挙げられます。

- ✓ 検索する対象を選ぶ
- ✓ 検索ツールを選ぶ
- ✓ 検索語彙を考える
- ✓ 検索条件を決める
- ✓ 結果を取捨選択する

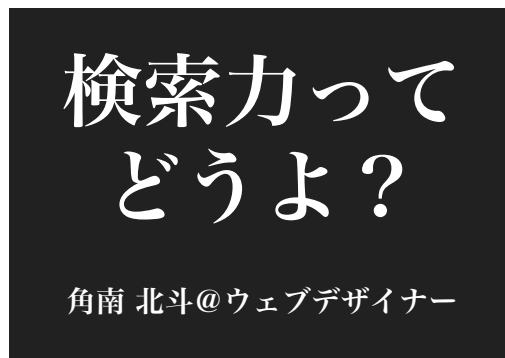
こうしてリストにすると大仰ですね。でも本当に何も意識せず、こうしたことを何となくしているのであれば、この機会に自分の検索力をもういちど見直してみたいかがでしょう。

検索力をつけることは、表面的なテクニックを単に覚えるということではありません。確かにGoogleの検索テクニックの解説書はいくつも出ており、それは多くの人々が検索力を欲しがっているということかもしれませぬ。でも大切なのは、アプリケー

ションの操作方法に関する知識ではなく、検索に対する本質的な理解です。

2. 検索は気軽になった

インターネットの検索サービスは日に日に充実し、据え置きのコピーコンピューターはもちろん、携帯や店頭設置の端末でも「検索する」という行為が普通に行われています。検索の日常化によって、私たちは毎日の生活のちょっとした確認を、したい時にすぐに行えるようになりました。それは、電車の乗り換えや天気予報のような実用的な情報に限りません。「今さっきのCMに出てた女優さんは誰だろう」といった、これまでは何で調べれば良いかわからなかったことも、検索することで（とりあえず）解決したりします。



ところで学校教育では、昔から「調べ学習」が行われてきました。その舞台は長く図書館でしたが、インターネットも登場直後から積極的に利用されてきました。情報量が膨大なものになってき

ている今、インターネットは図書館と肩を並べる情報リソースと言えるでしょう。

ただ、毎日の生活を振り返ると、図書館に足を運んで調べるようなことは、仕事などを除けばあまりないように思えます。「研究手段としての調べもの」のテクニックも重要ですが、日常よくする「気軽な調べもの」としてのインターネット利用のスキルも、もっと注目されてよいはずですが、今の情報教育において、その教育

実践はあまり目立っていないように感じます。

こう書きますと、研究に使える検索スキルがあれば大丈夫、旧来の調べ学習の実践で全てカバーできる、と思われる方もいるかもしれません。カジュアルな検索スキルぐらい使っていれば自然に育つよ、と言う人もいるかもしれません。でも本当にそうなのでしょうか。

3. 正解のない検索

インターネットでの気軽な検索が図書館の調べものと違う点はいくつかあります。例えば「正解がない問いを調べる」ということがあります。例えば、先日発売された iPod の評判、昨日のサッカーの試合内容に対する見解、いま流行っている話題の調査などはどうでしょう。あなたならどうやって調べますか。

検索サービスを使うと大量にリストアップされる情報。そのひとつひとつの正確さや適切さは様々で、同じ内容であっても表現の仕方によって印象は大きく異なります。情報をどう比較し取捨選択し行動するか、単純な正解はありません。自分が何を求めるかによって、ひとつひとつの行為の適切さは変わってきます。

旧来の調べ学習では、たいてい正解が決まっています。教師の求める検索結果があるとすれば、それが正解です。その場合教師は、学習者が誤った情報を正しいと思込込まないように、調べるサイトを指定したり、特定のディレクトリサービスを使って検索させたり、他の資料を提示したりするかもしれません。教師の評価する結果を得

ることが学習者の目標であり、それはフィルタをかけられ道筋をつけられた活動であると考えられます。

日常の気軽な検索には、そうした教師による（ある意味便利な）フィルタリングはありません。情報を得るためのスキルはもちろんです、玉石混淆の情報を取捨選択するスキルも必要です。誰もその場でアドバイスはくれません。そんな時に必要なメディアリテラシーは、旧来の調べ学習だけで身につくと言えるのでしょうか。

4. 取捨選択のアルゴリズム

いっぽう正解がある調べもの、より学術的な文脈での調べものにおいても、インターネット検索の難しさは存在します。インターネットの情報量が増大すればするほど、検索サービスの重要性が高まれば高まるほど、そこに依存してしまう恐れがあるということです。

例えばGoogleのデータベース。膨大な情報を日々溜め込み成長しており、ひとつの世界そのものという印象すら受けます。それゆえ「Googleに聞けば何でもわかる」という錯覚に陥りがちです。

Googleの世界の総体はそのデータベースそのものと言えますが、インターネット上の情報の全てがそのデータベースに組み込まれているとは限りません。クローラーがインターネットを動き回って情報を収集する際、何らかの基準によって弾かれた情報、つまりGoogleで検索できないようにされている情報も存在するわけです。インターネットは世界の全てではなく、その世

界はさらにGoogleによってフィルタリングされたものである、ということです。

また人間の情報処理能力には限りがありますから、Googleの返した膨大な数の検索結果を一度に把握することはできません。ある程度数を絞り込み、基本的に上位にヒットしたものから順に見ていくことになります。上位に表示される情報は、Googleに言わせれば「あなたが求めている情報である可能性が高いもの」です。

もちろん、Googleは私たちの頭の中を覗いて検索結果を返しているわけではありません。私たちが入力した検索語と検索条件をもとに、ページランクなどのアルゴリズムを使って表示の優先順位を決めているとされています。「このアルゴリズムに人間の作為は含まれない、全てコンピューター任せなのが最大の強みだ」とGoogle社は言いますが、重要なのは、人間の作為がどの程度であれ、私たちの情報収集はGoogleのアルゴリズムに大きく影響されているということです。検索結果の上位に表示される情報は、それだけ露出度が高く、相対的に知名度や信頼感も高くなります。逆に言えば、Googleの意にそわない情報は無価値であり、情報の海に埋もれて評価されることもないということです。

こうしたことを意識せずとも、私たちは検索を行うことができ、たいいていはその検索結果に満足することができます。そのことを「Googleの検索精度はすごい」ととるか、「私たちの思考はGoogleに規定されている」ととるか。これは、情報教育のひとつの面白いテーマとなるのではないのでしょうか。

5. 検索力ってどうよ、の理由

検索力は個人差が非常に大きく、検索下手な人はネットリテラシーも高くない。それが私の実感です。いま検索力のある程度持っている人は、書籍や人からの情報をきっかけに、インターネットを通して実践の中で学び経験を積んだ人たちです。学ぶ気もなく漫然とインターネットに接している人は、いつまでたっても検索力はつきませんし、インターネットを有効に活用できないのでその利用体験も豊かになりません。それどころか、誤った情報を盲信して煽動される危険性もあります。

学校を離れると「教えてもらう」機会は減ります。めまぐるしく変わるインターネットの世界では、自分から情報を取り入れて実践していく意識がないと、検索力を含めたりテラシーは相対的に下がっていきます。自分で能動的にスキルを高めていくしかないとなれば、教育にできることは何があるのでしょうか。今しか役立たない付け焼き刃の知識ではなく、これからも学んでいくために必要な根本的な知識を身につけてもらうこと。私はそれが情報教育のひとつの役割だと考えています。

今後いつそうインターネット上の情報量は増加し、検索サービスの種類も形も多様化していくことでしょう。そんな中で必要なのは、表層的なアプリケーションの操作方法ではありません。自分がどんな世界からどんなフィルタをかけて情報を引き出しているのかを自覚し、状況に応じて適切に情報を評価・行動していくこと。それが教育で習得を目指すべき検索力ではないかと思います。検索は簡単でも単純でもありま

せん。自分自身の検索力も顧みつつ、検索力と情報教育について考えてみませんか。

付記：どうよって何よ

ちなみに、このタイトルにもある「どうよ」という言葉。みなさんは「どうよ」という検索語を使って検索したことがありますか。企業名と「どうよ」をセットにして検索して、その企業の評判を調べるという方法があります（詳しくは、津田大介著「ググる」 pp.72-73を参照してください）。



実際にやってみるとわかりますが、リストアップされる情報の多くは匿名掲示板のもので、その多くは信憑性がゼロに近い情報かもしれません。

しかし、匿名掲示板の情報など無価値だと頭から決めつけるのは、信憑性を考えずに盲信するのと同様、メディアリテラシーを欠く行為であると言えるのではないのでしょうか。匿名情報を調べるスキルもまた、検索力向上の大切な要素だと私は考えます。

お知らせ

PCカンファレンスでの発表にあわせて、検索力について考えるウェブサイトを開設する予定です。本稿や発表では言及しきれなかった点もフォローしていこうと考えておりますので、興味を持たれた方はぜひアクセスしてください。

特設サイト：<http://shokuto.com/doyo/>

Text：角南 北斗（すなみ ほくと）

ウェブデザイナーおよびディレクターとして活動するフリーランス。様々なウェブサイトのディレクションから実制作までを手がけている。

もうひとつの専門は日本語教育学で、日本語教育学の修士号、日本語教師の経歴も持つ。教育的視点を備えたITの専門家として、教育現場のデジタル面からのサポートを精力的に行っている。

本稿に対するご意見・ご感想は

e-mail：hello@shokuto.com

までお気軽にどうぞ。